

景 / 観 / 文 / 化

NPO法人 景観デザイン支援機構 けいかん・きこう

<http://www.tda-j.or.jp>

2013-06-01

目次

- 表紙
「ストリートファニチャが作る街の表情」
／(写真・文) 宮沢 功
- 見開
TDA NEWS
「大規模開発プロジェクト『中野&渋谷』計画者からの報告」
／尾形 光男・奥森 清喜
- 見開
ランドスケープ事情
「地域の底力を引き出す“まちなか緑化事業”」
／正木 寛
- 裏表紙
景観文化Q&A
「シリーズ団地再生 その2」
／江川 直樹
- 裏表紙
景観ビジネス最前線
／大林道路(株)
- 裏表紙
ホワイト・ボード



ストリートファニチャが作る街の表情

ヨーロッパにおける街路や広場等、屋外空間はそれを構成する街並み等を含め非常に質が高い。特に景観構成要素の一つであるストリートファニチャの扱いは日本との違いを強く感じる人が多い。ロンドンのシティでは伝統的な建築物がつくる都市景観の中で、ストリートファニチャは鉄物を主体とした重厚なデザインで揃えられている。色彩的にも電話ボックスと郵便ポストの赤以外は黒の色彩で統一されており、それぞれのファニチャにはロンドン市の紋章が色彩も鮮やかなレリーフで付けられている。都市景観のインフラとしてのたたずまいとロンドン市の管理責任者としての姿勢がうかがえ、重厚な建築物と連携して都市アイデンティティを表現している。

パリではオスマンの都市改造を契機に整備されたアールヌーボー様式の地下鉄出入り口や19世紀半ばに登場した公衆トイレやコロンモリスと呼ばれる広告塔がエレガントで優雅なパリの景観を形成している。又、シャンゼリーゼ通りでは、地下駐車場整備の機会に実施されたデザインコンペで、フランスのフィリップ・スタルクによるモダンなストリートファニチャのトータルデザインにより、歴史あるシャンゼリーゼ通りの景観を一新させた。このようにヨーロッパではストリートファニチャを景観形成要素として活用している例が多い。日本では1970年大阪万博においてそれまで雑件として計画されていたストリートファニチャを案内所等、小工作物と一連のサービス施設として計画されたのが最初で、その後、各自治体でもストリートファニチャの重要性が認識され、街づくりの一環として活用されてきたが、都市のイメージを表現する景観要素として活用された例は少ない。人にいちばん近い位置にあり、人と直に関わりあう景観構成要素としての特性は、もっと積極的に考えられるべきではないかと考える。

TDA理事・景観デザイナー 宮沢 功

大規模開発プロジェクト 『中野 & 渋谷』計画者からの報告

都市の大規模開発プロジェクトは、単なる建築物の構築ではなく、道路や公園・広場など都市インフラの整備を伴うことが多い。良好な市街地環境の整備の見返りに、容積率等の緩和を認める、いわゆる都市再生特別地区や緩和型地区計画などの制度が適用される。このような手法を有効に使って、一般の市街地では成し得ないボリューム、高さなど巨大な空間づくりが可能になり、都市の新たなシンボル景観が生み出される。

今回は、東京で最近、完成した二つの大規模開発プロジェクト、「中野」と「渋谷」を取り上げ、計画・設計者から、その景観デザインのポイントを語って頂いた。

1 「中野四季の都市(まち)」
緑豊かな公園を中心とした街づくり



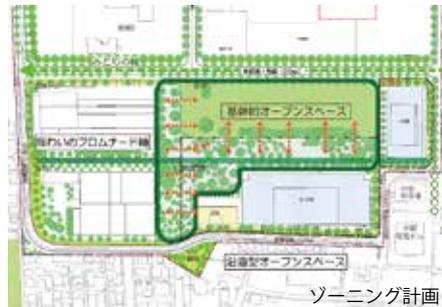
尾形 光男
㈱日本設計
シニアアーキテクト

「中野四季の都市」は多くの人たちが関わり、現在も進行中のプロジェクトです。

かつて、警察大学校等跡地と呼ばれていた敷地はオフィスビルや大学など先進的な都市機能と、防災性を兼ね備えた緑豊かな公園からなる「中野四季の都市」として生まれ変わりました。

また、JR中野駅から「中野四季の都市」への人の動きをサポートする駅前広場、東西連絡路など駅北口を中心とする第1期整備も完成しました。

このように再開発エリアの整備と中野駅の再整備が連携して進められてきました。



「基幹的オープンスペース」

都市計画公園である「中野四季の森公園」は平時には賑わいや憩いの場、災害時には防災空間として機能する空間です。

この約1.5haの広大なオープンスペースは既存樹木の利活用を積極的に行い、豊かな緑の保全と賑わいの推進をしています。

この公園は各区域から、自由に行き来ができることにより、賑わいの創出を積極的に引き出し、イベントなども活用されています。

「公園を複数街区が取り囲む市街地構成」

基幹的オープンスペースである「中野四季の森公園」に面し、中野セントラルパークイースト(オフィス)、中野セントラルパークサウス(オフィス)、帝京平成大学中野キャンパス、明治大学中野キャンパスが道路などに遮られる事なく、ボーダレスに配置しているという空間構成としています。

この特徴的な構成が、賑わい・交流を誘導し、公園と一体的なまとまった空間がある市街地の形成を図っています。

この様に、多くの人々がここに集い、交流が生まれ、賑わいが高まるような、「中野の新たな顔」にふさわしいオープンスペースネットワークの形成を目指しました。

「賑わいのプロムナード軸」

「中野四季の森公園」の南側に、この地区を東西に貫通する賑わい・交流機能や、みどりの歩行者空間としての機能を持った賑わいプロムナード軸を形成しています。

東端は地区のゲートゾーンとして、中野セントラルパークイーストのピロティと一体的な広場の整備を行っています。

中野セントラルパークサウスはこの軸に沿って低層建築を配置し、業務や生活の利便性、賑わいの創出に資するカフェ・店舗等の施設等を巧みに配置しています。

帝京平成大学中野キャンパス、明治大学中野キャンパスはエントランスホールなどを東側に向けて配置し、この賑わいのプロ

ランドスケープ事情

「地域の底力を引き出す“まちなか緑化事業”」



藤棚のあるお休み処に变身した民家



芸者衆によるお囃子の舞台

スカイツリーのオープン以来、その周辺の浅草界限はこのところ大変な賑わいを見せている。そんな折り、浅草観音裏と呼ばれている場所でも静かな変化が起きているのをご存知だろうか。

芸者さんたちのお稽古場である見番を中心にした、いわゆる花柳界がある街である。2008年より始まった(公財)東京都公園協会による“まちなか緑化事業”の一貫で街の姿が少しずつ変わりつつある。

そもそも、まちなか緑化事業とは近年、東京都の緑を増やす上で公共地の緑は増えているにもかかわらず、民有地ではそれを上回る量で減っている現象があり、その問題を何とかしようと始まった事業である。

まちづくりのプロと住民がワークショップを通じていく度となく話し合っ作り上げて行く事業で、私もガーデンデザイナーとして、最初の説明会から設計、植栽工事、その後の管理運営に至るまで付き合っている。緑が美しい景観をもたらすこと、緑によってコミュニティに一体感が醸成されること、そして緑があることで微気候が生じ、街が涼しくなることを体感して貰いながら進めて来た。

もともと、この下町は植木を育てるのが好きで路地裏には植木鉢の溢れる園芸文化の盛んな地域であるが、近年、建物の建て替えにより敷地いっぱいなたてられた建物が増え、

ムナード軸を受けとめています。

この様のように「中野四季の都市」は都市計画が各区域の景観形成をうまく繋いでいる好例ではないでしょうか。



中野四季の都市（まち）

2 「大きく変貌を遂げる渋谷」
渋谷における景観デザインの方向性
奥森 清喜
(株)日建設計
プロジェクトマネジメント部 部長

ヒカリエがオープン1周年を迎え、東横線の地下化、副都心線との相互直通運転化の開始など、渋谷のまちづくりが大きく動き出しており、メディアを始めとした注目度も高まりを見せている。渋谷のまちづくりはヒカリエをリーディングプロジェクトとしてスタートし、鉄道や駅前広場などの都市基盤や駅直結型の開発計画が今後概ね15年に渡る整備期間を経て、まちづくり全体の完成を迎える予定である。

渋谷のまちづくりは、その谷地形を活かし、多層に連なる広場、歩行者ネットワーク、これらをつなぐ縦軸空間であるアーバンコアによって、その骨格が形成されていく。アーバンコアは移動装置であるだけでなく、都市のランドマークであるとともに

個性ある街並みのゲート空間としての役割も持っている。すでに完成しているヒカリエのアーバンコアは地下3階から地上4階までをつなぐ縦軸空間であるとともに、青山方面に向かうゲート空間を作り上げ、渋谷の新たなランドマークとなっている。今後も駅直結街区の開発において、複数のアーバンコアの整備が計画されており、地上、地下、デッキレベルをつなぐとともに、まちの個性を表した多様なデザインによるアーバンコアの整備により、個性ある街並み、多様な界限、活気とにぎわいある景観を形成していく。

このような渋谷の景観デザインの方向性は、地元の町会や商店会等の討議を重ねて作り上げられた「渋谷駅中心地区まちづくり指針2010」に示されている。東京都の景観地域ルール適用第一号地区として、独自の景観方針の策定と景観デザインの調整組織として「渋谷駅中心地区デザイン会議」を組織している。大丸有エリアに代表される事前に景観形成の具体的な取り組みを示す「ガイドライン型景観誘導」と異なり、渋谷においてはデザイン会議での議論をもとに景観誘導を図る「プロセス型景観誘導」を行っている。スクランブル交差点に代表される渋谷の劇場型景観構造は行き交う大量の人々そのものが景観の一部を構成し、国内だけでなく世界から多くの観光客を集客し世界の人々を魅了している。これらの景観構造は計画的につくられたものではなく、自然発生的な行為の重なりで生み出されてきたものである。渋谷の景観を

再構築する上で、「プロセス型景観誘導」が採用されたのは、この自然発生的な過程で生み出されてきた多様性と活力を再生産するひとつの方法論であるといえる。

「プロセス型景観誘導」の都心部での展開は画期的な取り組みであるといえ、今後その成果が具体化していく中で、渋谷らしさがどのように継承され、さらに新たに創造されていくかについて着目していただければと思う。渋谷から目が離せない。



ヒカリエのアーバンコア：移動しながら、周りの風景や様々な情報が展開される新たな空間を作り上げている



渋谷の将来イメージ

正木 覚 環境デザイナー・(株)エービーデザイン 代表



改修前の店先



まちなか緑化事業で改修された店先

無表情な街並みが目立つようになっている。

デザインを始めるに当たっていくつかのポイントがあった。1)地域の文化的要素を活かす、2)目で見える範囲でつながる緑とする。まずは見番の周辺を中心に手を加える事にした。

昭和の初期に建てられたコンクリート造りの無機質な壁や窓を竹の格子で覆い、墨色の大型の植木枡を配置して柱を立て桁を通し、藤棚とした。ここにモミジやウメやミカン、フジになどを植え込み、野草をくわえると見違える程豊かな街並みに変わった。さらに自販機の取り払われた民家は藤棚のあるお休み処に変身した。

すると住民たちの中で明らかに意識の変化が起こった。祭りの時は緑の街並みを背景にこの場が踊りやお囃子の舞台に大変身、とても賑やかな祭りになった。さすが花柳界の底力である。緑によるまちづくりは単に美しい街並みを作り出すだけでなく、潜在的にある街の力を引き出すことに改めて驚かされた。

その後、三年に渡る事業でまちなみが緑によって繋がり活気のある街になりつつある。観光客を載せた人力車が当たり前のように見番の前に行き交う姿がとても情緒があり、それはさも昔からそうであったように見える。本来、まちづくりとはそんな自然な姿でありたい。

Question : 持続可能な環境形成に貢献する具体的な手法は、どのように考えるべきでしょうか

Answer

1. “小さく解く” “混ぜて解く”

つくることが目的だった時代は、大きくまとめることで環境を効率的につくろうとした。しかし、これからの持続可能な環境づくりはそれではたちゆかない。団地は一挙に大きくつくったものだが、それゆえに周辺の市街地との乖離も激しい。地域としてのまちなみ、住民の主体的な参加、環境の多様性といった視点からも、いかに小さく解いて、混ぜていくか、私は、これが持続的環境への再生を考える重要なカギだと考えている。欧州の団地再生で重要視されるパーミアビリティ(道路網の持つ浸透性)といった考えも、小さく解く、混ぜて解くためのひとつの考え方である。



2. 建築基準法 86 条一団地の解体

建築は、1つの敷地に1つの建築物が原則である。しかし、建築基準法第86条第1項の規定による「一団地建築物設計制度」によって、団地は1つの敷地に複数の住棟が建てられている。建てる時には効率的だったが、複数の住棟が1つの建築物のように扱われているため、住棟を個別に修繕・増築・建て替え・用途変更することがとても難しい。今後主流となるストック活用型の団地再生には大きな障壁だ。私たちは文科省の支援を得て、大規模公的集合住宅団地のストック活用型再編(再生・更新)手法の開発に関する研究(平成23年~27年)を続けているが、昨年、この86条一団地の解体を基軸とした再編提案を公表した。団地の空間構造の再編は、コミュニティや持続性に拠って立つ集住環境の景観づくりにも不可欠だ。団地内に公道を配し、各住棟(もしくは連担建築物設計制度による小規模な複数棟)が、普通のまちのように接道する形態とし、駐車場や敷地外周の沿道空間を小規模な戸建て住宅や店舗併用住宅、福祉施設などに転用するという提案だ。住宅には用途不可分という考えが認められており、木造の離れも実現できる。住棟のリニューアル手法の開発だけでなく、団地そのものの再編手法が検討されなければならない。

景観ビジネス最前線



景観の向上と環境保全を
経済的に実現する技術で
みなさまのご要望にお応えします。

 **大林道路株式会社**

〒131-8540 東京都墨田区堤通 1-19-9

Tel 03-3618-6507 Fax 03-3618-6634

URL : <http://www.obayashi-road.co.jp>

ホワイト・ボード

■TDAサロンを開催しています

新たな空間創造の可能性について気楽な雰囲気でするサロンを開催しています。今期は、特に、自然素材を活用する製品に焦点を当てています。今後は、6/22「肥後煉瓦」、7/22「日本の互あるいは石」を予定しています。皆さまのご参加をお願いします。

■都市デザイン史ワークショップ(第一回)を5/22に開催しました

1960年代以降の都市デザインの歴史について、景観デザインに関わる多様な分野の専門家が集まり、複眼的視野で記録し、批評や評価を加えることにより、新たな課題と視点を探求するワークショップです。今後とも継続していく予定ですので、乞うご期待。



NPO法人 景観デザイン支援機構 事務局

〒151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷 3-28-8-304

Tel : 080-6722-4114 Fax : 03-6459-2221 E-mail : news@tda-j.or.jp

<http://www.tda-j.or.jp> 【編集: (株)アーバンプランニングネットワーク】 201306700

私達は下記の企業・団体のご協力をいただいています。

(株)昌平不動産総合研究所 / (株)住軽日軽エンジニアリング / イオン(株)開発本部 / 都市環境デザイン会議 / (株)コトブキ / 三井不動産(株) / (株)都市環境研究所
読売広告社・都市生活研究所 / 関西ペイント販売(株) / 東京ガス豊洲開発(株)